

# 2017 年度 センター試験 国語（現代文）（本試験） 分析

## 全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	大問数：2 題	解答数：20 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化    ○ やや難化	● 変化なし    ○ やや易化    ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	○ 変化なし    ● 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	○ あり	● なし

### 総評

評論・小説を合わせれば、昨年同様の出題レベルである。評論は科学社会学者による科学観への批判に関する文章で、文章量は昨年とほぼ同じであった。昨年に比べると各設問の選択肢が若干選択しづらい形で作られており、その点からすると昨年よりやや取り組みづらい問題だと言える。小説は問題文の文章量が、昨年よりも 1 ページほど減少している。4 年連続で小説の全文であった出題が、本年度は小説の一節を出題する形となった。設問は選択肢が昨年よりも判別しやすい形になっており、その分取り組みやすい。例年傍線部問題が 4 題の出題だったものが 3 題となり、問 5 で本文の随所の心情を問い判断させる出題がなされた点が、例年にないものであった。

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	小林傳司『科学コミュニケーション』	50 点	現代の科学及び科学技術が生み出した人工物が人類に災いをもたらしている現状の中で「科学が問題ではないか」という意識が社会に生まれ始めているという状況に対して、科学者がそれを情緒的反発とみなし一般市民への科学啓蒙を主張する。そのことを病理と捉えた科学社会学者が科学の本当の姿を認識することを処方箋として提出し、従来の科学の発想を掘り崩したが、結局はそれが科学社会学者の特権性を主張することになると論じた文章。昨年度同様、各段落に段落番号が付されている。文章自体は分かりやすく、比較的読み取りやすかった。
第 2 問	野上弥生子『秋の一日』	50 点	秋の一日に主人公が子どもと一緒に絵の展覧会に出かけた日の、会場までの出来事と展覧会場での出来事を述べた小説の一節。3 題ある傍線問題がすべて説明問題であった点と、心情に関する問題が問 5 の一つにまとめられている点が特徴的であった。問 6 の表現に関する設問は、昨年以上に選択肢が判別しやすく、取り組みやすい出題となっていた。

# 2017年度 センター試験 国語(古典) (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	古文：6 題 (8 問)	漢文：6 題 (8 問)
難易度の変化 (対昨年)	古文：○ 難化 ● やや難化 ○ 変化なし ○ やや易化 ○ 易化 漢文：○ 難化 ● やや難化 ○ 変化なし ○ やや易化 ○ 易化	
問題の分量 (対昨年)	古文：○ 増加 ● 変化なし ○ 減少 漢文：○ 増加 ● 変化なし ○ 減少	
出題分野の変化	古文：● あり ○ なし / 漢文：● あり ○ なし	
出題形式の変化	古文：○ あり ● なし / 漢文：○ あり ● なし	
新傾向の問題	古文：● あり ○ なし / 漢文：● あり ○ なし	
<p><b>総評</b></p> <p>古文は、江戸時代の擬古物語からの出題であり、昨年の説話に比べて、文章に用いられている表現や語句・文法等の難易度が上がった。問 6 では、例年出題されていた文章の内容一致問題ではなく、登場人物(合計 5 人)の一人ひとりについての説明の正誤を問うものであった。この問い方はセンター試験では初出である。また、一昨年同様、和歌を含んだ文章が出題されたが、和歌そのものの解釈が問われたのは 2013 年以来 4 年ぶりである。</p> <p>漢文は、江戸時代の儒学者新井白石の遺稿から出題された。日本人が書いた漢文の出題は 2012 年追試験の頼山陽の遺稿があるが、本試験の出題は初めてであったため、驚いた受験生もいるのではないだろうか。日本人が書いた漢文であるため、漢文独特の語句などは用いられていないが、随筆で抽象表現が多いため、内容読解の難易度が上がった。問 2 は解釈問題であったが、ここまで短い部分解釈は過去 10 年出題されていない。内容読解の難易度も上がったため、想像以上に解答時間がかかった受験生も多かったと思われる。</p>		

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 3 問	古文『木草物語』 ※江戸・擬古物語	50 点	<p>昨年は 8 段落構成で、場面の急転が 3 回あったが、今年は 5 段落構成で、目立った場面の急転はなく、主人公「菊君」の言動・心情の変化を中心に描かれている。本文前の説明とは別に主要な出来事をつかむことが読解上のポイントであった。</p> <p>問 1 の傍線部解釈では、3 問中 2 問は重要単語と文法だけで解くことができ、昨年より易化した。問 2 では傍線部の助動詞の文法的意味で分類させる問題が出題されたが、文法的意味が設問文中にも選択肢にも記載されないのは初出である。その他の設問に関しては、例年通りの出題形式・難易度であり、解答に迷う選択肢も少なかった。</p>
第 4 問	漢文『白石先生遺文』 ※江戸・随筆	50 点	<p>昨年の 192 字とほぼ同じ 198 字、3 段構成の文章であることは変わらない。「第 1 段落：身近な事例と故事を提示⇒第 2 段落：前段落を引き継ぎつつ中心話題を展開⇒第 3 段落：この文章の執筆意図の説明」という文章展開をつかまなくては、内容理解・設問解答が難しかった。問 1 以外は、傍線部の文構造および傍線部外の内容まで理解しなくては、正答を導くことが困難であった。ここまで文章全体を読解させる出題は、近年にみられなかったことである。</p>